

井上井月句集

行き暮し越路や櫓の遠明り
銭取らぬ水からくりや心太（ところてん）
落栗の坐を定めるや窪溜り
葱白し足のしびれを火に当る
卯の花に三日月沈む垣根哉
膳椀の露きるうちや春の雪
花に身を汚して育つ虱哉
夏衣いまだ風をとりつくさず
袴着や酒になる間の座の締り
立ちそこね帰り後れて行乙鳥（つばめ）
遣るあてもなき雛買ひぬ二日月
妻持ちしことも有りしを着衣始（きそはじめ）
松よりも杉に影ある冬の月
世の塵を降りかくしけり今朝の雪
何云はん言の葉もなき寒さかな
塗り下駄に妹が素足や今朝の秋
鬼灯（ほおずき）を上手にならず笑くほかな
色白や鬼灯はさむ耳のたぶ
散込やさくらの窓の細めなる
翌日（あす）しらぬ身の楽しみや花に酒
花散や若い女の角隠し
降とまで人には見せて花曇
象潟の雨なはらしそ合歡の花
山姥も打か月夜の遠きぬた
転寝した腕のしびれや春の雨
山吹に名を呼ぶ程の滝もがな
時鳥旅なれ衣脱ぐ日かな
不沙汰した人も寄合ふ煮酒かな
梅が香や菜して置く湖月抄
須磨の暮散来る花の身に寒し
淵明も李白も来たり涼み台
よみ懸けし戦国策や稲光り
折ふしは人にもかざす日傘かな
霞む日や網提げて越す川の幅
菜の花の径（こみち）を行くや旅役者
藤咲くや遠山うつす池の水
山雀（やまがら）や愚は人の多かりき
鶏頭やおのれひとりの秋ならず
ほつれたる髪かきあげて清水哉
命ぞと云うては掬ふ清水かな
およびなき星の光りや天の川
飛ぶ星もそれかと見えて銀河
ぬけ星は石ともなるか鳴く千鳥

外れぬは腕に覚えや桑の弓
興に引く弓のあたりや夏の月
朝川を渉る人あり散柳
売に来る鋸鎌や百舌鳥の声
さめさめの顔ばかりなり涅槃像
自ら蓮にうる表なし月の照り
翁日や墨絵の軸に古つくえ
こぼれてもこぼれても萩の盛りかな
明日知らぬ小春日和や翁の日
我道の神とも拝め翁の日
鶯の乙音（つぎね）をまつや筆置きて
若鮎や背すじゆるさぬ身のひねり
紅梅や客待受けの薄化粧
日頃いふ望みは足りて花の兄
降り積る雪に急ぐや花の兄
小町とは花に無類の桜かな
それぞれの色このみして花ごろも
誰をまつころの奥や山さくら
宵ながら花に燈せる火は朧
葉桜と成ても山の名所かな
旅ごろも恥つつ花の筵かな
旅人の我も数なり花ざかり
用のなき雪のただ降る余寒かな
遅き日や暮盤の上の置手紙
春雨や心のままのひじ枕
富士にたつ霞程よき裾野かな
何処やらに鶴（たず）の声聞く霞かな
淡雪や橋の袂（たもと）の瀬田の茶屋
山笑ふ日や放れ家の小酒盛
手元から日の暮れゆくや凧（いかのぼり）
舟を呼ぶこ糸は流れて揚雲雀
春風や暮盤の上の置き手紙
今日ばかり花もしくれよ西行忌
乙鳥（つばくろ）や小路名（こじな）の多き京の町
寝て起て又のむ酒や花心
梅が香や流行（はやり）出したる白博多
春風に待つ間程なき白帆哉
風涼し机の上の湖月抄
岩が根に湧く音かるき清水かな
水際や青田に風の見えて行く
涼しさの真ただ中や浮見堂
寄せて来る女波男波や時鳥
山はまだ花の香もあり時鳥
玉苗や乙女が脛（はぎ）の美しき
塗り下駄に妹（いも）が素足や今朝の秋

秋風や身方が原の大根畑
飛ぶ星に眼のかよひけり天の川
名月や院へ召さるる白拍子
芋掘りに雇はれにけり十三夜
駒ヶ根に日和定めて稲の花
初時雨からおもひ立首途（かどで）かな
時雨るや馬に宿貸す下隣
松の雪暖かさうに積りけり
鷹匠の涕（はな）すすり込（こむ）旭かな
酒さめて千鳥のまこときく夜かな
明日知らぬ小春日和や翁の忌
明日しらぬ日和を花の盛りかな
旭（ひ）は浪を離れぎはなり鷹の声
目出度さも人任せなり旅の春
初空を鳴きひろげたる鴉かな
松の雪暖かさうに積りけり
下風に心なぐさむ柳かな
あらけなき風にもなびく柳哉
よく保つ俄日和や桐の花
花の山取りてかりてと鬼の面
若鮎の瀬に尻まくる子供かな
若鮎や花と汲まるる網の露
松茸や知らぬ木の葉のへばりつく
闇き夜も花の明かりやにしの旅
山里や雪間を急ぐ菜の青み
よき水に豆腐切り込む暑さかな
闇き夜も花の明りは西の旅
朝兒（あさがほ）の命は其日其日かな
うとうとと旅のつかれや若葉かげ
よき酒のある噂なり冬の梅
除け合うて二人ぬれけり露の道
初虹や裏見が瀧に照る朝日
染め急ぐ小紋返しや飛ぶ小蝶
のぼり立つ家から続く緑かな
卯の花の雪やあやなき月の照り
水ぎはは白にてぞあれ杜若（かきつばた）
初雪や紫手綱朱の鞍